



閑菴齋
後岩傳
編和
書

^ 13
3156
!



56
1

曲亭主人著 溪齋英泉畫

開卷驚奇俠客傳

第壹集

天保重光單闕
羣玉堂精刊

橋源

俠客傳第一集自序

善於堂

新儀



老氏曰大道廢有仁義仁義者道之異稱也
而有似而非者故韓非比儒俠擯斥之曰儒
以文亂法俠以武犯禁二者皆譏而學之
稱於世云夫俠之為言彊也持也輕也
排難解紛孔子所謂殺身成人者且曰
遷及傳游俠其序援韓子且曰今
巷人也讀書懷獨行君子之德不
當世亦笑之又曰今游俠其行

譏讀
如非



義然其言必信其行必果已諾必誠不食
軀赴士之阨困既已存以死生矣而不
能羞伐其德蓋亦有足多者此有憤激而
之是以其語厚而意深也斑固不原此意以
其進奸雄譏之可謂誤矣今于彼書檢之則
有延陵孟嘗春申平原信陵之徒皆卿相富
厚之俠也至如閭巷之俠又有朱家田仲王
公劇孟郭解數人自漢而後迨唐有劍俠有
女俠小說所載不遑毛舉也

國朝自古必有其人在焉但無論記傳載之
以余所聞近世有大鳥居逸平關東小六幡
隨長兵及號茨城草袴白柄大小神祇者皆
是閭巷之俠而其所為或未必合於義當立
氣齊作威福結私交以立彊於世者也較諸
古者道德之士不勦聲色消宇內之大變在
相去非唯宵壤而已然氣豪以此至揚
之兇暴此戰國之餘習未改其私義廉潔
有然也使當時無此人則士風自是衰俠之

之義曷可少哉。余有感焉，而無所憤激，不激
不憤，猶且傳俠客，所以然者，何也？蓋以仁
抱道，猶不免蓄。是故新田、殂于足羽、楠氏、陸
歿、湊河、大凡此二公，誠忠與日月爭光，德義
流芳，而不旣惜乎枝葉，不再振榮，枯得喪與
南朝終始矣。是以世人不平，以爲遺憾。余之
固陋，不敢自料，寧思欲排其難解，其紛叨補
舊記之闕，文慢載野乘所未言，演義立傳，以
快_{中人}之心。若夫興絕顯隱，非游俠則其事不

潔使人心愉快，非寓言乃其談不博，無財而
能俠其俠，此益奇也。用滑稽善談，罔不出人
意表，宜名不虛立，書不虛行，竊有賴于此。又
惡問虛之與實哉。是書數十卷，然後可以結
局。今茲所著才五卷，是爲第一集，其第二集
以下，應陸續刊行。云浪華書賈羣玉堂，他
戶書賈文溪堂相謀，乞余之著。二四年，其
塞其責者，及刻成，聊亦識歲月。

天保二年端午前一日 曲亭蟬史撰

開卷驚奇俠客傳第壹集總目錄

卷

第壹回

製青囊著演購髑
封白紙英直託狝君

卷

第貳回

依遺訓賢童知踏
迎旅櫬義士憐母子

卷

第參回

照黑夜螢火導海濱
誇明察鼠輩被恥辱

卷

第肆回

陰德入老御得奴婢
陽卜綠鬪鷄倡主僕

卷

第伍回

謁林住南將感舊綠
演便宜老尼薦村酒

三

第陸回

福草村三兇奏奇功
釀藥酒郡領詳來歷

卷

第柒回

七里濱洪波洗衆惡
千葉城土療埋潮毒

卷

第捌回

啓衣箱小六得遺書
救癩疾著演失銅笄

卷

第玖回

御士二遇癩病人
光棍初懺悔舊惡

卷

第拾回

相摸川小六視横死
遊行寺著演葬蝨蛤

第一集總目錄終

本集起南朝元中九年至北朝應永十八年
春秋大九二十箇年小説第二集陸續刊行

依勢作鏡二輔

野上史著演



豪俠氣節其名若雷
 虚已博愛仗義散財
 寡欲自守不容禍胎
 至信共患旅懶得回
 一堆枯骨初睡夜臺
 空緘屈處克保嬰孩

贊著演



藤澤
 晚稻



たのみやれそをわ
 る乃迹をね
 ちまはあま川終
 去の唇の縁
 贊英直

館大六
 英直

客店目四郎

像替第...

像替第...

脇屋右少将義隆



精忠三世
傳迄是君
南史雖絶
猶有遺文

贊脇屋少将 雕窓

藤白隼人正
安同



草あみひめを
清む月の露に
海あや入るむ
此を流さる

贊新田主僕 同

畑六郎二
時種



新田
左少将
貞方





たつらめもおもわつれさう
あけまれのあろとて
かろくまをのれぬ
質小六並母屋

善形堂

姉母屋

錦小六助則

像



千葉介
兼胤

順逆如罔人多捷天
巧恣權詐藥鳩仙
勢利資榮惡冠當年
皇天既定冥罰豈愆

雷

妙算
錢ト
茶の
像

像

俠客傳第一集列傳姓名目録

將相 新田貞方 脇屋義隆 足利滿兼 足利持氏

上杉憲定 千葉介兼胤

武士 野上史著演 館大六英直 畑六郎二時種 上泉秀武

鳥山七郎 船田小二郎 堀口五郎 江田藏人 高柳兵庫 藤白安同

田子勇傳二 荒海灘藏 荒海船藏 野上奴婢之助 館小六助則

婦人 晚稻 母屋 信夫 女僧妙算

市人 逆旅主人 肝八 姿鏡屋甲 紅粉阪小正二 臺町緒三太

相摸川 篙師 客店目四郎

奴隸 字六 画七 畑平 畔藏

通計三十有五名第一集姓名目録終

開卷驚奇俠客傳第一集卷之一

東都 曲亭主人編次

第一回 青濃之製りく若演觸體を購ふ 白紙を封りく英直孤君を託す

鹿苑院 足利義滿相國の將軍たり。應永の年秋と。相摸列高座郡藤澤道場の左盡頭野上史著演と喚做。一個の御士ありけり。そ和實と尋る。美濃の野上の人氏多し。莊司著實と喚れり。源平壽永の闘戦。軍小従ひ。任糧運送の責を掌り。始終その功あり。源氏一統の後継者あり。藤澤南御の邊。莊園三千餘貫。賜り藤澤東西八ヶ邸の目代を多し。是より數世。累々。今の著演が大父多し。野上目著左とひれ。後醍醐天皇。元弘三年閏六月の鎌倉攻戦。新田義貞朝臣。從ひて。又兵糧運送に

更さうはあつた。その功をたのむ。新田足利の確執より程も其大乱を。賞の沙汰はもろく刺南北両朝の争ひ。義貞朝長足利の情。皆そへ。若者佐とれを惜む。世を憤り退隱と。遂亦足利家の權使の使。これ鎌倉將軍の時より。所帯不易の御教書賜。御士を七倍。あつた。世を安送。その子村主若種。生涯病をけ。官途成。絶。只讀書の更さう。戦國稀。博士あり。好。人の師。素より名を會。人不知。年六十。その子史著演。著演の総角より。文を學。武を嗜。父祖の方。既。壯年。及。此。親の喪。在。三年。く。丹。倦。常。その妻。晚。縮。の。忠。臣。草。命。の時。孝。主。終。身。の。喪。あり。今。在。豈。一。日。且。大。父。の。官。初。新田殿。不。從。い。つ。南。朝。の。為。一。臂。の。力。と。畫。の。足。利。一。統。の。世。を。

此のふらふら媚て采利を求む。これ俺の分守り。法度。在。不。義。の。與。名。利。の。奴。と。あ。る。世。の。恥。と。あ。る。論。と。録。君。の。音。領。年。始。の。嘉。儀。を。票。ま。の。参。仕。を。欲。せ。況。の。方。さ。る。權。家。の。交。る。と。あ。る。と。素。より。饒。裕。と。あ。る。常。の。施。と。好。む。性。と。あ。る。俠。氣。の。尚。凶。年。の。値。と。あ。る。倉。廩。を。盡。粟。を。散。と。里。人。の。饑。を。賑。救。と。あ。る。豊。年。の。亦。路。を。造。り。橋。の。朽。を。修。復。と。衆。人。の。資。と。ま。り。の。事。と。あ。る。大。約。鄰。御。近。邸。の。兵。燹。の。家。を。焼。れ。或。世。の。落。魄。で。鐵。湯。の。逼。り。或。久。く。病。臥。て。妻。子。を。類。の。便。者。と。あ。る。然。る。も。庭。弱。不。具。の。婿。に。あ。る。の。親。疎。の。差。別。を。米。を。贈。り。錢。を。取。り。必。厚。く。惠。む。と。衆。人。と。あ。る。を。知。る。と。あ。る。境。を。隔。り。は。志。と。あ。る。名。を。傳。せ。と。あ。る。不。幸。と。あ。る。世。を。渡。り。難。と。あ。る。折。々。小。野。上。詩。尋。と。あ。る。告。乞。と。あ。る。の。居。所。と。姓。名。を。傳。へ。も。回。り。と。あ。る。入。別。子。永。樂。錢。と。あ。る。百。文。と。あ。る。米。五。

新田足利の確執より程も其大乱を。義貞朝長足利の情。皆そへ。若者佐とれを惜む。世を憤り退隱と。遂亦足利家の權使の使。これ鎌倉將軍の時より。所帯不易の御教書賜。御士を七倍。あつた。世を安送。その子村主若種。生涯病をけ。官途成。絶。只讀書の更さう。戦國稀。博士あり。好。人の師。素より名を會。人不知。年六十。その子史著演。著演の総角より。文を學。武を嗜。父祖の方。既。壯年。及。此。親の喪。在。三年。く。丹。倦。常。その妻。晚。縮。の。忠。臣。草。命。の時。孝。主。終。身。の。喪。あり。今。在。豈。一。日。且。大。父。の。官。初。新田殿。不。從。い。つ。南。朝。の。為。一。臂。の。力。と。畫。の。足。利。一。統。の。世。を。

伴と取むけの居てもその足とまを。西二回あるとありとも。その折毎小推辞むり
 る形のどくお與へ。ある人竊小れを諫めて千仞の海に測るとも人の心の好む量
 で知られぬの多し。名も徳も莫か。救とてふの。名も宿所の。困窮者
 南一四と取む。人の及ぶ所行なれ。中少搗鬼あり。然るも困窮者
 のも徳を以て誘へ。會するも。對酌む。その。困窮者
 室と和殿の意見見定ふ。ある。初より。思ふ。君子。唯食を
 受む。疑む。名を詔ぬ。居所を。回。施行の義。遣ひて。人辱
 の。似。食。悲。人。素。論。人。由。緒。あ。の。世。小。幸。あ。る。飢。渴
 勝。此。の。救。を。俺。小。と。ね。穿。の。葉。を。欲。と。素。生。を。回。人。の。さ。る。は。ん
 ば。の。義。と。東。西。と。興。へ。名。を。回。入。の。虚。実。の。此。百。計。念。慮
 くる。縦。その。人。告。る。困。窮。者。の。方。を。受。む。竊。偷。する。あ。る

る。優。志。一。俺。の。質。素。と。言。と。奴。婢。を。使。む。妻。子。の。鹿。布。を。被。せ。り
 身。も。亦。疎。食。と。啖。へ。美。の。為。財。と。惜。む。親。の。箕。米。を。兼。し。り。只。施。を。受
 きて。一。日。も。疎。略。せ。し。ま。け。れ。幸。の。と。莊。園。の。水。旱。の。患。る。又。年。來。俺。の。戦
 場。の。小。の。軍。兵。の。乱。妨。ある。福。を。施。す。の。年。來。歴。れ
 とも。然。と。東。西。の。竭。め。陽。報。の。れ。願。ひ。も。天。監。の。と。然。る。あ。る。と
 説。論。を。諫。め。の。感。嘆。と。恥。と。悔。と。思。ひ。け。れ。ほ。野。上。著。演。の。身。飽。心。地
 や。あ。ひ。有。一。日。里。の。杜。校。と。れ。彼。と。召。取。へ。酒。を。飲。し。と。小。ま。性。を。失
 擾。乱。の。近。比。五。六。十。年。都。も。鄙。も。閉。戦。絶。れ。そ。の。用
 徑。の。第。壹。と。肥。ま。の。抑。幾。億。方。名。を。け。ん。傳。る。小。違。ふ。は。下。就。し
 名。も。亦。葉。武。者。雜。兵。之。矢。石。亦。命。を。損。と。頭。を。捕。り
 して。還。る。身。方。も。亦。罕。る。の。白。骨。の。路。傍。の。妙

今もふる。觸體どくろの。たるもの。取む。と。觸體どくろ一個。銀百文。價あひを定めて買かう。困まゆる。み。それ。衆あま皆一談あひ。言こと。諸あま弁一。その。目め。易やす。江え。ま。ま。この。さ。これ。鎌倉。近。御。箱。根。以。東。這。首。の。那。首。の。野。邊。也。と。觸體どくろの。病。坊。る。大。糞。より。ま。る。ほ。價あひ。よ。う。一。買。た。る。驛。路。遠。く。小。荷。駄。の。尻。を。赶。て。畑。肥。を。糞く。へ。る。遠。木。麻。で。拵。甲。斐。の。生。活。を。る。べ。れ。そ。の。め。と。美。引。つ。後。て。合。共。侶。小。退。り。け。是。と。し。後。彼。此。の。觸體どくろ。と。著。演。必。直。鈔。取。老。且。優。て。青。布。比。糞。之。類。を。復。觸體どくろ。と。此。件。の。裏。小。装。上。と。これ。小。も。那。社。伎。師。の。著。演。を。相。稱。之。福。老。長。者。と。喚。做。ら。る。前。約。違。ふ。と。ま。た。を。數。の。作。善。之。感。と。さ。く。雷。の。応。答。の。日。毎。回。ぬ。ま。る。け。り。か。く。そ。の。觸體どくろ。の。數。一。百。級。か。毎。小。著。演。を。瓶。小。飲。進。行。す。送。り。遣。豫。て。寺。僧。と。相。謀。て。寺。内。の。岡。下。氏。を。最。大。に。穿。つ。と。の。觸

體らと。瘞う。と。大。凡。一。稔。可。の。程。一。萬。餘。級。の。小。著。演。則。之。圖。小。萬。人。塔。を。做。た。石。塔。を。建。て。其。表。と。ん。ま。ひ。住。持。を。請。ま。う。と。大。衆。を。聚。合。經。を。讀。し。水。陸。の。施。餼。を。修。行。し。且。其。所。料。を。寄。進。し。後。ま。の。書。提。言。市。け。の。信。は。藤。澤。十。里。西。方。の。あ。の。戦。死。の。觸體どくろ。の。と。は。涉。獵。畫。け。の。後。然。る。東。西。誰。も。と。來。ざる。の。と。既。小。著。演。の。義。名。の。江。湖。上。の。高。く。す。え。遠。た。景。某。の。懐。ひ。の。近。於。愛。敬。せ。る。の。も。現。戰。世。も。ま。た。後。件。を。は。れ。も。天。道。に。盈。る。を。虧。と。の。理。の。漏。れ。あ。り。け。小。著。演。四。十。の。ま。ま。嗣。育。一。個。あ。る。一。の。妻。の。晚。縮。の。の。と。の。世。小。真。實。の。ま。は。折。小。觸。れ。良。人。小。薦。め。て。子。孫。の。為。小。侍。を。側。室。を。娶。り。ま。う。と。の。ま。は。小。著。演。の。然。り。と。て。已。だ。と。る。ぬ。ま。も。ま。ま。く。薦。め。り。と。小。著。演。頭。を。ち。掉。て。ら。る。然。る。を。見。渾。家。小。如。の。あ。ら。な。と。の。ま。の。妾。の。の。賢。女。を。は。い。是。の。口。舌。起。す。べ。い。ま。ま。と。ま。の。前。條。中。子。の。あ。ら。な。と。の。め。れ。と。も。一。向。の。信。を。世。小。石。婦。の。あ。ら。な。と。の。ま。を。穿。つ。と。の。亦。子

二月の廿三日。新院中先規の如く。太上天皇の号を辨せられたる。猶且、嵯峨の大
 覚寺に仙居不定の御影を祀り、往々延元元年の冬十二月廿三日。後醍醐天皇の御影を
 祀り、武臣足利義満の氏皇孫逆を避るるを吉野に臨幸す。後醍醐天皇の御影を祀り、
 龜山を愛小御世重承の御影を祀り、五十ある七稔の春秋を歴る。今この時、南朝の
 朝西天皇、稍御合體せしければ、麻の如く、木系れる世の是れ、風波のたて長前
 くまぐらんと萬民、秋の夕、夕、似て武家を足利氏をいふ。その角、南朝の公卿、武臣、勢を深
 く憎みて、刺太上天皇、山院の皇子を春宮立せしむ。是れ、緯ひとて、前約の叛るるを
 るる。南朝忠義の卿相、雲客、累世、義烈の武臣、門、齊一、怨憤りて、或は山林、小
 隱遁、或は言、孤城を成と、戦致さるる。是れ、任れ、新田、楠の世々、抗るる。魂
 義胆、武勇、智略も、今ゆる、小、施、甲斐、の、は、自、方、の、漸、々、は、落、下、る、有、敵、無、難、の、
 樹下、小、漏、る、雨、繁、く、さ、る、る。新田、自、方、義、隆、の、西、大、將、の、先、相、を、一、圓、這、地、を、退、

此、且、時、運、の、俟、ん、と。自、方、朝、臣、殘、兵、百、名、の、身、を、保、つ、て、北、條、の、邊、に、居、る。大、
 隆、ぬ、も、殘、る、士、卒、三、十、名、可、お、て、武、藏、相、模、不、隱、れ、多、自、方、の、勇、士、を、取、入、れ、と、く、
 姿、を、實、ま、旅、衣、五、名、七、名、主、從、を、引、つ、れ、も、く、張、の、月、の、夜、に、首、途、に、見、え、
 玉、鐙、の、み、の、奥、を、す、み、が、た、濁、る、世、の、田、字、草、安、積、の、沼、の、わ、ね、を、外、に、出、し、
 く、ろ、鳥、と、身、を、倣、え、木、燭、竹、の、さ、の、里、を、夜、を、あ、の、り、澄、み、し、ま、る、ひ、け、り、時、小、應、
 年、の、秋、九、月、と、ま、る、の、時、の、右、中、將、の、郎、君、五、才、の、る、る、果、を、降、南、の、清、
 れ、る。這、郎、君、の、母、上、亦、是、新、田、の、氏、族、の、大、館、左、馬、頭、氏、義、隆、の、女、弟、を、嫁、に、
 君、の、外、祖、の、大、館、左、馬、頭、兼、伊、豫、守、氏、明、也、の、當、初、新、田、楠、中、納、言、義、隆、
 隊、の、外、祖、の、大、館、左、馬、頭、兼、伊、豫、守、氏、明、也、の、當、初、新、田、楠、中、納、言、義、隆、
 任、國、を、陣、殺、し、け、り、の、嫡、子、上、総、權、介、氏、宗、也、の、正、平、七、年、の、秋、九、月、
 二、十、七、日、と、本、國、野、中、卒、を、二、男、大、館、左、馬、頭、氏、義、隆、の、初、名、と、孫、五、郎、と、の、け、り、

余後叙爵して後五位下右馬介補任せられ天授二年北朝の秋九月軍功は賞さ
 られ従五位上を昇進し左馬頭あるされる。尤も武略の達人あり義隆朝臣と共に
 奥平在りて武家の大敵と戦を屢する。天授六年北朝の冬比流矢の爲木傷
 られる。金瘡竟る愈ざりて年二十九に卒せり。然れども氏宗氏義隆兄弟の天授
 大館二郎宗氏主元弘三年北朝夏五月新田殿魁の隊に属して鎌倉を陣致せし
 より父祖二世中心義隆を南朝の爲に始終死力を盡したる勇將あり。由は世や
 皆目足直餅とあり果て郎君の爲に後見せし者あり。賸郎君の母上の産後の
 病着肥立むく五稔前小世と逝ぬ。今亦父少將の弓折は勢究りて往方も定めぬ
 落とのを緯訪ふの軒端の松風篁子の下を鳴く虫より外は絶てある。獨
 大六英直の大館氏の庶流也。忠臣を貳ののるは。郎君生れぬ比より英直を
 傳れて妻の母屋と郎君の姉母とせられける。只是の末の事。義隆二十の歳に

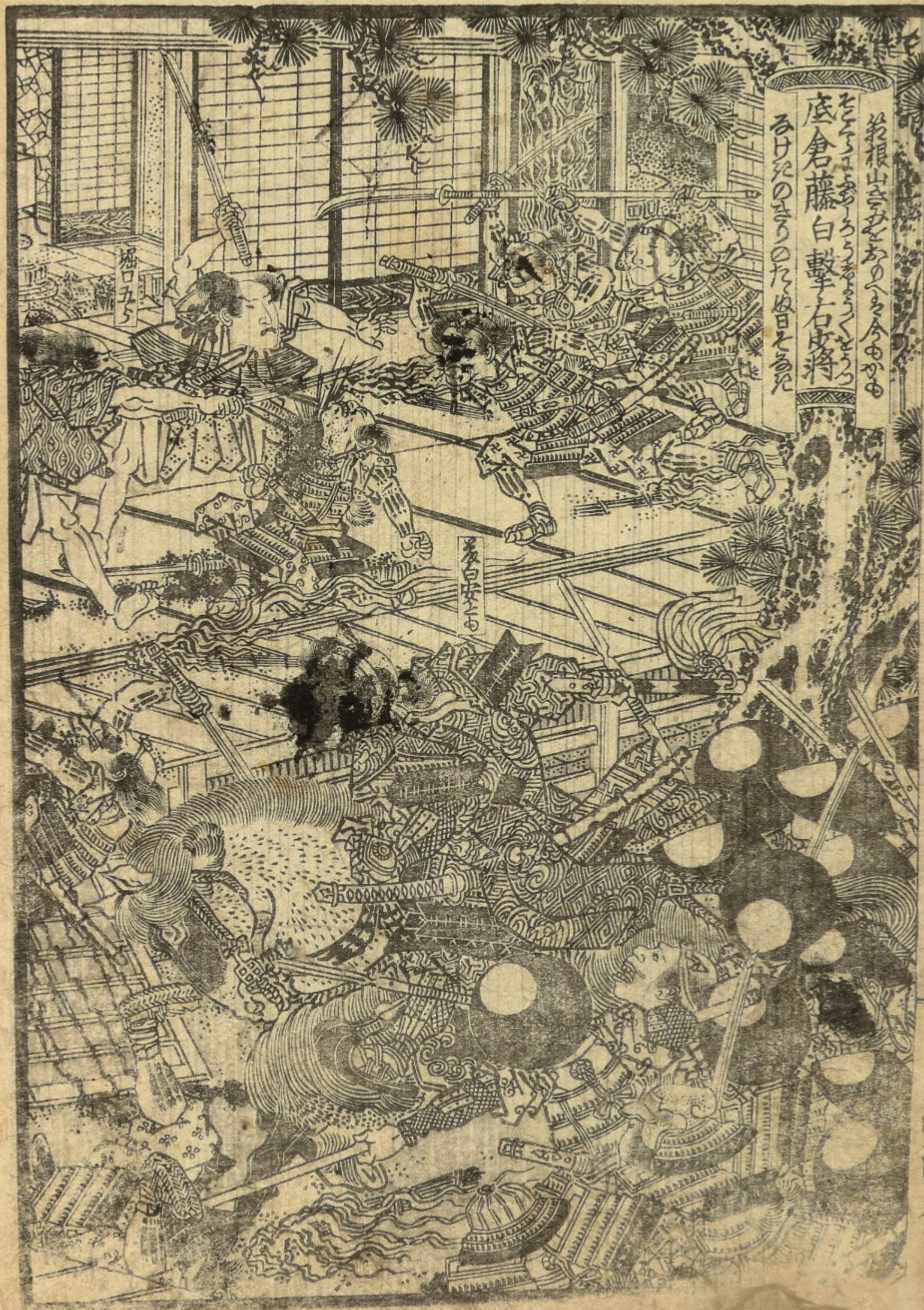
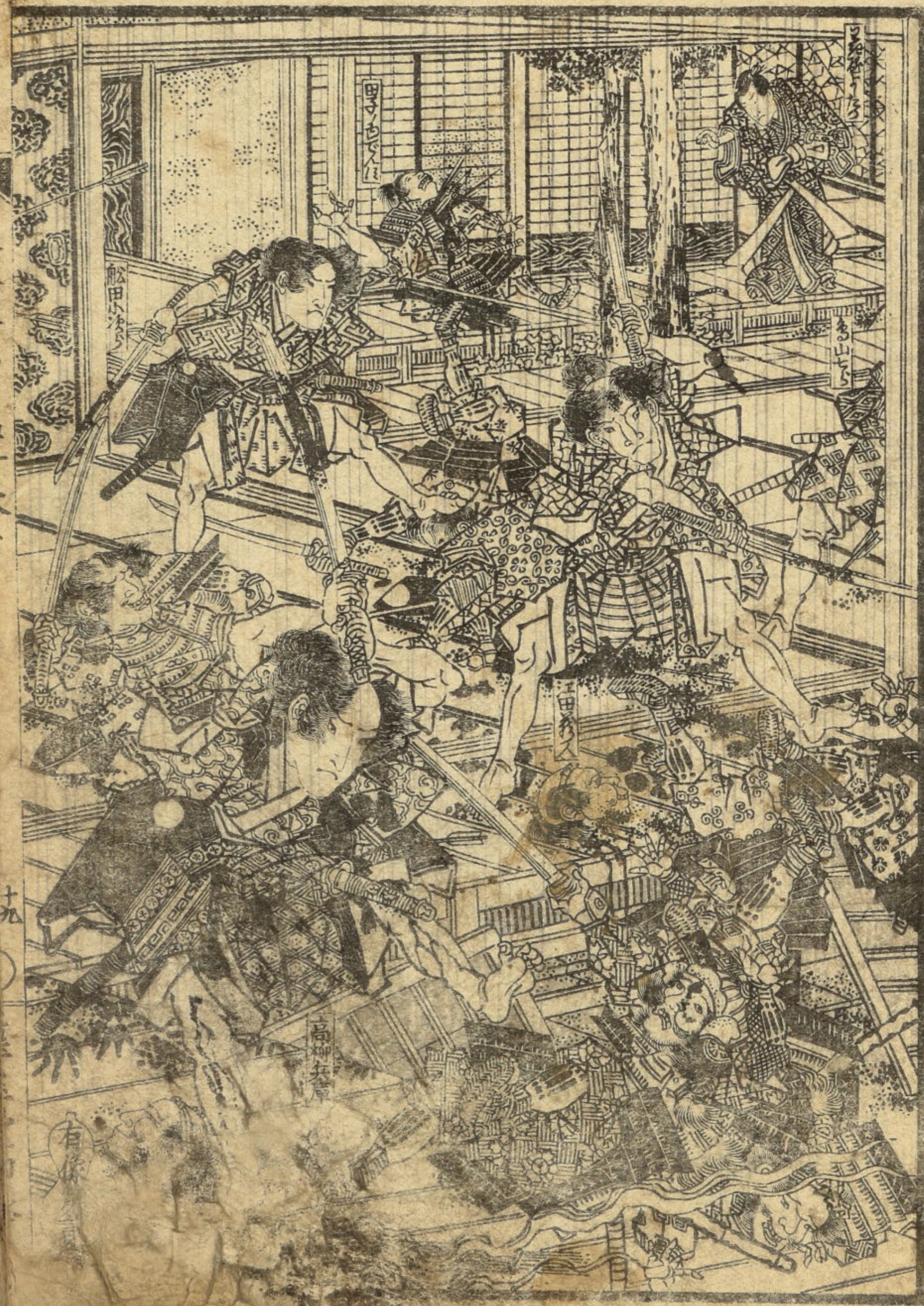
郎君生れぬ比より俗の四十二の二歳児を信する子に二親の事あり。義
 隆朝臣もその義の據りて郎君の襁褓の中にも大館氏を冒りて英直自ら
 よとて乳名を英直の俗稱の因にて小六九とつけしをゆひける。信を由緒あり。主後
 義隆武藏落の折英直夫婦を召近して俺今自分鳩心爲武藏に授て
 卦けども那首と敵地の安危を越す料とて。そのを救す梅見を推し。便
 地所爲然るも武運護く由多。父子一所の敷れる。遺恨のなき。汝の這
 地は苗と迹と輝の貌を變て小六九と守育よ。多るん。今番の伴は先途
 たるん。遥か優て第一の中心臣とありん。せめ。宣示して家の系圖
 きく。文字の名を英直の預けぬ。是より英直の母屋共作す。小六九
 姓名を變形貌と變。関と渡瀬の間。字を楫鎖と。冷島を編小。財
 未だ僅か膝を容れ。鄙語の坐す。食の山。空に壁言論。漏れ。財禄を

体言細細詠で却退して母屋のいさ。夫々の月比大心労をいふ。とてお有つん。
 病疾心痛也。雷相露の恙ふわね。一町とも歩行を忌へ。瘡る目まで逗留と。
 ぬる看とらぬいそ。耳は方茶を吹咀して復を来めとせ。然程小母屋の宿の
 泥爐を借と。茶立則不良人小甚。腐め小六丸の心ぞ。側とて慰め。六日を履
 程は英直の絶えんとせ。病苦聊退して夜も日も呻吟を。一日小半碗の粥を
 咬むるのまけり。然と取不旅の悲しみの多小。瘴兒の杖前向の指。瀧ぬ人草枕
 は旅宿の病臥ら。瘰癧と氣力の衰。さう就はあつて妻と子と心の憂。遣
 方絶てるまふ。の夢を八目睡の夜。毎小夢杜鵑の不如帰と鳴く。いと遠る
 れ。陸奥より遠く来おける悔し。神小生佛小。願甲斐あり。夏樹植鎮守の
 神社へ兩個と。送代の幾回。のう熟言朝。夕夕。離色の雪と。花も長。日景も
 消て立。ま。免月も既。晦途く。比。鎌倉より。と。旅客們が。譚を重

紙戸隔る。這方の夫婦。心も。程小。那旅客の。いけや。脇屋。中。將。義隆。主。の
 年来相摸る。所親許深く。潜ひて。りけ。と。知る。の。さ。り。小。近。曾。恙。あ。れ。の。從。者
 統小四五名。俱と。貌姑峯の。麓路る。底倉。赴。め。て。具湯治。表。の。程。小。鄰。郷。の。人
 氏。多。り。け。藤。白。棚。九。郎。安。同。と。喚。む。武。士。の。多。し。と。知。り。け。快。推。寄。て。討。捕。れ。を。竊。ひ。夜
 敷の。準備。と。ま。つ。の。身。の。隊。兵。の。と。ま。る。土。兵。野。武。士。們。を。招。聚。て。百。四。五。十。名。迎。梅。雨。降。を
 夜小。紛。れ。暗。號。と。定。めて。生。轉。々。と。推。寄。来。り。義。隆。主。の。と。り。ま。浴。室。の。四。下。と。捕。籠。電。と。吐。と
 揚る。閑の。声。姑。く。鳴。を。静。ま。せ。て。馬。兼。杖。の。棚。九。郎。四。下。小。御。音。く。声。苛。め。り。小。宮。方。の。俗。人
 多。脇。屋。義。隆。快。出。鎌。倉。官。領。家。の。御。説。小。依。て。鄰。郷。氣。智。の。人。氏。多。藤。白。棚。九。郎
 安。同。が。身。勢。を。以。向。や。遣。る。逃。る。兵。們。と。呼。ぶ。声。と。共。侶。小。夜。月。一。競。小。宮。隊。の。人。氏。多。り。け。

死の覚期此も騒ぎぞ。あつらふ。この隨ふみち大刀を抜撃し。稠々敵を砍伏し。斬撃
 撃を靡けて。此と先途と戦ゆる。烈しに修煉の刀火を向ひ。誰の免と。真額利削
 車研録の蔓と。花と。と。瞬間に三千人鮮血塗れ。輾転。この
 枕と並敷れ。ゆをれ。寄る。視。餘る。大勢。れ。物。と。せ。自。方。の。戸。散。り。踏。踏。り。踏。踏。り。
 叫ぶ。直。攻。前。一。自。方。の。遮。られ。後。引。け。比。自。方。の。前。刺。て。透。間。々。射。け。矢。柄。を。今
 降。る。雨。り。敏。糸。く。烏。夜。不。見。め。く。鎗。長。刀。の。雲。間。を。渡。り。月。も。隈。る。け。る。太。雷。鼓。の。突。戦。
 何。山。目。果。べ。い。も。見。え。け。り。け。り。あ。る。あ。れ。も。衆。寡。の。勢。ひ。入。鐵。石。の。あ。ま。さ。れ。然。し。も。一。人。當。千。兵。
 田。鳥。山。江。田。堀。口。高。柵。們。一。個。と。七。數。人。所。深。瘡。を。負。ぬ。ま。け。れ。是。ま。を。と。ひ。け。近。つ。
 敵。と。引。組。ん。で。刺。違。々。雨。夜。の。星。と。ま。る。ら。ぬ。一。歩。も。去。り。で。戦。死。あ。け。ん。得。る。勇。士。と。え。
 有。任。程。の。義。隆。主。出。居。の。杉。戸。を。盾。ふ。り。用。心。の。為。枕。小。建。る。角。弓。合。さ。て。差。詰。り。詰。詰。
 敵。十。四。五。名。射。て。伏。す。箭。種。も。竭。ん。と。せ。折。近。臣。們。の。皆。敷。れ。る。誘。然。と。退。り。腹。を

切りと獨語。臥房を投る。藤白。見。弟。を。甲。子。勇。傳。次。佐。と。見。て。鑓。を。指。
 跟。る。来。り。耶。と。声。被。て。刺。さ。せ。義。隆。閃。り。と。身。を。反。轉。左。を。無。當。め。透。さ。右。を。右。
 抜。合。る。及。頭。と。さ。る。擲。ち。ぬ。寬。違。に。勇。傳。次。の。胸。前。丁。と。撃。撃。串。れ。て。苦。と。叫。び。声。
 と。共。仰。反。伏。れ。て。息。絶。り。その。間。義。隆。主。與。る。一。室。不。退。然。腹。極。切。て。痛。俯。の。言。取。
 期。本。月。廿。四。日。夏。四。月。の。真。夜。中。比。の。ゆ。り。享。年。四。九。九。歳。と。傳。え。痛。公。の。三。世。は。名。
 將。南。朝。股。肱。の。武。臣。の。一。も。三。年。の。大。義。時。至。り。命。運。其。処。鳩。鳩。の。藤。白。連。が。鎮。せ。
 軍。慮。を。攻。惱。ま。れ。て。腹。を。研。れ。る。を。憂。慮。せ。然。程。藤。白。連。九。郎。亦。同。陣。勢。下。
 知。り。脇。屋。殿。の。首。級。を。賜。ら。る。餘。近。臣。五。名。の。首。級。も。知。り。の。け。れ。の。け。れ。
 一。箇。々。々。の。牌。を。付。首。級。の。相。推。と。次。の。日。管。領。の。御。館。へ。ま。り。て。候。々。と。傳。え。り。
 當。主。鎌。倉。の。管。領。足。利。滿。兼。朝。臣。の。孫。斜。る。を。執。り。ひ。て。射。て。首。級。実。に。取。
 棚。九。郎。亦。宣。せ。り。義。隆。の。朝。敵。也。且。當。家。累。世。の。讎。言。れ。る。日。裏。他。の。陸。奥。と。傳。え。り。



佐々木五郎

あつとぞえし比よ。さきく往方と云ふ心。いかに久し知るより。小安向輔討捕。甘の神妙の義京師へ注進。及あの日室町殿。大なる満足を思ふ。回功賞として。安向の氣賀底倉。不莊を賜ふ。又隊兵の功あり。感状。今より本府に在任。忠勤を励む。とみづから仰下され。棚九郎。思ひ拜と退出ける。徳而又その次の日。義隆主役の首級共。由比の濱。遺の鼻。唯目前のて来。その為体。任参る。野田の内海。義朝主の敷。又その孫頼家。伊豆の修善寺。之紋。これ。這田底倉。義隆主の敷。皆浴室。信源氏の大將。連の三箇。浴室。死所。小安の不思議。あつと寝。説話。相宿の外。哀れを知。自一調。高訛。詠。時旅宿。夏遣。人。念然。志。嘆息。の外。母屋。初。頭。良人。と俱。敬。耳。裏。胸。の内。苦。泣。声。と。楚。と。喘。縮。る。袖。涙。の。玉。散。ぬ。

あつとぞえし比よ。さきく往方と云ふ心。いかに久し知るより。小安向輔討捕。甘の神妙の義京師へ注進。及あの日室町殿。大なる満足を思ふ。回功賞として。安向の氣賀底倉。不莊を賜ふ。又隊兵の功あり。感状。今より本府に在任。忠勤を励む。とみづから仰下され。棚九郎。思ひ拜と退出ける。徳而又その次の日。義隆主役の首級共。由比の濱。遺の鼻。唯目前のて来。その為体。任参る。野田の内海。義朝主の敷。又その孫頼家。伊豆の修善寺。之紋。これ。這田底倉。義隆主の敷。皆浴室。信源氏の大將。連の三箇。浴室。死所。小安の不思議。あつと寝。説話。相宿の外。哀れを知。自一調。高訛。詠。時旅宿。夏遣。人。念然。志。嘆息。の外。母屋。初。頭。良人。と俱。敬。耳。裏。胸。の内。苦。泣。声。と。楚。と。喘。縮。る。袖。涙。の。玉。散。ぬ。

鄰郡近御る。戦死の骸骨一萬餘級を集めて塚を築きたり。事修りて、
不其れえ。知るも知るぬも人の心なる。今の世にて小六殿と託すもの、
下と仰ることも。俺の年来縁きければ、一面の交りあり。や俺身の死後、
せ高きより、何と云ふ。樹の形、いふを、左き右き尋思し、
便點とあり。詰且小六九と母屋も側さる。折辛しと身と起し、
紙と書状のごとく巻篋で、固く封皮とし、墨才の筆と抜合、
新田の餘類館大六郎英直と書、印標寫し、果々息吹か、
布んとく。必を撲地と臥し、けは、危に病病より、苦しむ。

第二回

遺訓に依り賢童踰踏を知る
旅櫛と迎て義士母子と憐む
却説去の朝小六九の又只親の病着の平愈とけ、祈らんと、鎮守の神社、

英直の母屋と呼て杖起させ、伏枕し、罪れて權へ、四下あり、
近づく然るも知りし声、底を、渾家の何と、
この既分明な、宿念六日の昔、浦あり、
任ておろく、何人、亦郎君と、
樹を伐、草を、又、
とも、
川の驛より、
曩歳、
なりて、
意中、
あまの、

外なる洩しのひそと生口をくらげく小六丸を落す涙を振絞は頭を擡て親を更え仰らけ
 たるひの脇屋殿の陸奥と落させぬ比も俺四五才許る時めわ有つて果
 夢の心地と人の嗚呼のまの親の故主でござせしを悔け今下ゆらぬ
 るるを登る公のうへ悪ゆるく那処へあつて俱に戦殺あつて左ても右ても存命
 本意の慥せぬ人の熱生運入り俺身もまじ恨れぬ故主の讎敵那藤白を
 討捕く神霊を慰めなり且く俵せぬひの腕を扼し母屋の吐嗟と推禁め
 声高人のやう久獅子の生れをの見る百獸威伏の蛇蝎の僅一寸も物吞
 と欲すると氣あつてのひのうへ必す年々の倍で遅く讎言を敷くといふ叱るあつね
 潜れぬせと潜る身小出さく幸ひる及ぶると必起と氣色を人の悟らるる親
 さへ身さ亡ふべし不覚ふめとてとらと徹られて小六丸の過言をた必けん誠然然りと
 心もあも口を鉗まら然程のその夜さ母屋の主人小就任員と醫師の謝銀櫃の價

行轎の指料もでのる隨不送る還して後をきと思ひ候ふる言夏の夜の向明を
 る比の豫て宿より詭を兩個の轎夫の時違を平常後輿をうち肩掛て来や
 焦々と呼門也主人の馳と指揮と板と擡起さる件の後輿小乗せなと目足
 先小母屋小六を早飯と薦られ一膳小向ひるも送は折虫箸の進み身装
 ある行累の後輿の附け親子の馳ひ草鞋を引提りたる主人并小家内
 る女婢們も別れ告る口誼の胸を塞り輝暮く哀情ヨリ多る程小大の
 明て茂林とまろ鳥の声も常かかると心裏哀しく涙あ路のさむも去向の僅板
 東路一里二十里小口とびば最も日長は比るれも亭午ふるも同件の後輿
 引添ふと藤澤の御小末まけの世不知れ野上の宿所の隠れあつても
 屋の後輿とち卸さく故意後にも我をり西三声呼門程の動女の若くは
 べ。応と合て立出たり登時母屋の小腰を折め奴家の這里の御主人の親類某甲

病苦も初は倍して送恨も方あるけん血と吐くと親しくの後僅の二日ありて
 傍らある終区の前一日聊病病の閑あり折の送られとて千餘なる前日
 主君の仰と稟で這地ある道道せ折儀々の度中ら宿願ありて我を結ばし
 りの兄とあれその縁の趣と初て奴家お説示と俺と那人よかの如く素も異性の
 兄弟されも相別れより天の一方山河千里隔る多身年来言えけれ胡越の道過
 たり然れども野上生の義お背くもあは俺死を極と極で那里到るとも報と報
 して忘れざしく汝們母子の憐みんぞ那人の戦死の觸躰一萬餘級と購集せと
 せえ信実慈善二人と得ては海内一の俠者今この世に英直と妻と子共と海
 の那人あるを誰やあは這義とありぬのと丁寧送言病苦を忍びて無措る書
 翰と折遞とされも亦肉を漏るるとも具に知られぬとんを御座を仰ぐものと
 声雲の袖の雨蓑代衣あはねども照る日疎世と陝布の行状をうら披せ英直が

送らる那一封と遞とまも著演のり下との縁ひらとて記憶のあは素より
 ぬ情由るれども且その書翰を受とるとえれば正しく標識の野上史殿まらる新田餘類
 館大六郎英直とあり軀て封皮を推折せ披てられ白紙の誣り限りもる然
 ぬ貌とまもくとそ皮と名く巻篋と肚裏小の巻英直俺と一面の交のあはる縁
 と俺行状と傳とて妻子と託せと欲する小書記とせよのりれば標書景の姓名を
 写して白紙と封せりいぬいぬの優るとの苦に意中と示せし然れども其身性
 名新田餘類と跡と書あるは忌憚るる素生と隱さる悔あをよと赤心るれども本
 心と妻子もきり明々地知る事とて異性の兄弟もよめい購め々々俺の對して告
 せし白紙の状の自注とせ世の憚りある人の妻子と知るとのよと義の爲と後難
 せし必し杖持と著演ととあられけ尙念をいふと是考のよ及んぬと
 英真脇屋少將義隆朝臣の家隸ると疑ひ俺大父著佐大人新田左中將従

ひる元弘の功ありといふも義貞亡きを悔ひ世を憤り退隱せよ。不肖の俺身に至るまで出て足利家の仕さるに那英直のまてりを知りたるや。そを左にせしむるに今この母子の家留也。羈旅の難義を極ま。未見の知己の甘く。父祖の遺命。ふふ似ら。嗚呼。命を地中尋思。母屋の對ひ。自今示談せしむ。婢の趣。由あり。館生との歩。時天地の柱。言義を結ひ。竊の異姓の兄弟。なりの。この這御。程遠く。假名川の旅亭。病々。身。告も来りけ。只。訪。長。別。送。憾。猜。非。如。自。筆。の。書。翰。の。妻。の。子。の。訪。候。の。強。面。の。終。の。臨。て。信。叮。寧。の。通。の。送。の。今。の。疑。べ。の。此。の。意。の。兄。母。子。の。身。の。引。受。て。生。涯。疎。疎。の。杖。の。子。息。の。何。処。の。送。の。詰。末。の。初。の。側。の。引。着。指。の。世。の。俺。の。隔。の。世。の。憑。の。美。引。の。人。の。誠。の。又。袖。濡。の。母。屋。の。鼻。の。ち。の。年。来。良。人。の。

疎遠なり。昔契す違はせぬ。いと美し。歎息の中。歎ひ。人の為。も。是。の。優。を。追。薦。の。亦。あ。る。も。あ。る。も。小。六。の。柩。を。成。ら。し。後。に。前。の。送。の。指。の。信。と。報。知。せ。る。の。辱。を。必。し。快。致。し。は。と。の。立。を。推。林。の。時。這。首。の。坐。せ。る。の。禮。服。の。更。め。て。俱。に。柩。を。迎。へ。と。辭。せ。り。と。説。示。し。て。堂。々。と。鳴。ら。せ。一。個。の。若。黨。を。遣。り。來。ま。け。る。側。に。招。近。つ。け。て。汝。等。の。あ。る。の。後。門。前。の。由。來。客。あり。総。角。の。俺。怪。を。成。る。旅。櫛。の。日。假。名。川。の。客。店。の。身。ま。り。の。俺。親。類。の。亡。骸。を。今。俺。の。迎。へ。に。汝。の。老。僕。と。共。に。在。客。店。の。許。の。俺。怪。の。信。と。報。て。柩。を。成。れ。快。々。と。急。と。追。を。遣。り。母。屋。の。對。ひ。自。今。示。談。せ。し。む。某。の。奥。へ。退。之。御。母。子。來。意。の。趣。を。前。妻。の。知。悉。く。衣。裳。を。更。め。て。柩。を。信。と。説。示。し。且。く。允。の。と。辭。と。與。へ。退。之。登。時。著。演。の。妻。の。晚。稻。の。屋。親。の。説。示。の。機。密。の。英。直。を。年。來。の。義。兄。弟。の。の。知。之。候。の。服。



奇人難見休將仗
稱羨相千秋景記君

史記傳第一冊卷一

六九



秋意之のあまのぬるのせいの
陰徳總一理禍福唯自求
莫道天公遠方寸任悠悠
くちやこころのせうさ

美空朝
義望
空絨記
後真時
虎岡老納
手書
劉元

かへね

小六

あひのあ

あひのあ

更させその身も衣裳も更めて復客房不出てあつ誘とる母屋と直
程小母屋の先へ走らる小六丸は著演の美引て今板を初演の首尾
感涙の進む骨を柩に離れては著演を迎へる著演はこれを見て
つれ和殿へ小六丸を遣はし和殿の小父を著演の旅亭より父を喪ひる哀傷艱苦を推
痛み死をいへうもあつ然れどもち歎くも死する親の懸ふあつる
揃も亦是孝ぞう佳猶子のぞと礼記本文見えればよろしと著演は父と母を
亦子を多て艱育せしむる小後室の心と慰められて小六丸は恭く拜見して時の不祥も
上著演は且感下且促とて莊客們を指揮し柩を衆より行儀興を受取ると門内へ除
櫛へまきける是より下著演は謙く趣甚麻を云ふその次は卷のそのは詳分と聴終り

閑卷驚馬奇俠客傳第一集卷之一終



大勢の勢
大勢の勢
大勢の勢

